

2017年会頭ミッション



「キューバ・カナダ視察団」報告

本所は立石会頭を団長として、9月30日から10日間の日程で、総勢31名の視察団を派遣した（主管・国際交流特別委員会 納屋 嘉人委員長）。米国との国交を回復し、今後の発展が期待されるキューバ、資源大国からIOTやAI関連企業の育成・誘致により先端産業大国への変換を図るカナダを訪問し、その実態を調査した。

キューバの可能性を探る



ハバナ新市街の革命広場

キューバは2015年7月にオバマ大統領政権下で国交回復を果たし、条件付きながら米国からの渡航や、農産品等一部品目の輸入など、制裁が緩和され、徐々にではあるが経済関係・人的交流も進展し、同年9月には安倍総理も日本の総理として初めて訪問し、官民連携による日本企業の進出を後押しするなど、経済関係の強化を打ち出した。

今回の訪問は、投資環境、貿易、観光の分野での可能性を探るため、まず現状の把握を行うことを目的とした訪問となった。

まずはキューバの首都ハバナ。深夜に到着したこともあるが、街中はとにかく暗い。社会主義国なので、基本的に市街地にはネオンサインはおろか、看板さえ見当たらない。街灯も薄暗い。そんな中でも街行く人々の顔は平穏な優しさが伺えるのに少し違和感を覚えるほど。

キューバ商業会議所では、エルナン

デス・ギジエン会頭への表敬訪問と産業動向のレクチャーを行った。エルナンデス会頭は「アメリカの経済制裁が続き、経済は遅れているが、革命により教育に力を入れ、大学まで無償のため高度人材が豊富なのが強み。以前は欧米の企業も数多く進出しており、当時に培った技術力もある。北米・中南米に隣接しており、貿易中継地としても有望であり、京都企業とも是非親密に交流していきたい。」と、今回の我々の訪問を機に、京都との経済交流が活発になることに期待感を寄せておられた。

在キューバ日本大使館の渡邊大使には、キューバの現状をレクチャーいただいたが、要約すると、「政治体制は盤石で、外交能力に長けているが、国営セクターが中心の計画経済で、急激な成長は望めない。物品は慢性的に不足し、製造業部門、農業部門の生産性も低い。石油は出ないので口シアやベネズエラから輸入しているが、



不足する物品輸入とともに、医者や看護師の海外派遣など、サービス産業部門の輸出で補っている。共産党の独裁政権であり、自国に都合の悪いことは基本的に何も教えてくれないので、実際のところ投資先国、貿易相手国として今後有望であるかという疑問符が付く。ただ、外国人でもキューバ人と結婚するなど、国籍を持った場合は成功しているケースが多い。外交官としては、不透明な政權体制に苦慮しているというのが本音のようだ。

旧市街は丸ごと世界遺産に登録され、街並みの修復がこちらこちらで始まっているが、工事途中で資金がつかずほったらかしの状態のところも多い。働いている人たちも生産性が高いとは言い難い。いくら頑張っても給料が変わらないからそれも仕方ない。ちなみに70%を占める公務員の平均月収は3400円程度。

次の訪問地は、キューバ随一のリゾート地パラデロ。白砂の海岸が20kmにわたって続くカリブ海でも屈指のリゾート地だ。アメリカ人の渡航が制限される中、トロントから3時間余りで来ることができる常夏の地ということで、カナダ人に人気が高いという。ホテルも建ち並び、観光地としての潜在的価値は高いといえる。ただ、極端に言えばホテルとビーチしかなく、アクティビティーを求めて訪れ



記念品交換をする立石会頭とエルナンデス会頭



キューバ商業会議所前にて集合写真



渡邊駐キューバ大使よりレクチャー



キューバ随一のリゾート地パラデロ



パラデロで食したシーフード!

る観光客には物足りない。お土産を買おうにもクレジットカードは殆どの場所では使えない。世界的なリゾート地になるためには、根本的な観光インフラの整備が必要であろう。

さて、キューバに可能性は見いだせるのか? 勿論未開発国であり、膨大な開発ニーズ、未開拓の市場への先行投資など、将来的な魅力はある。観光産業も有望だ。しかしながら一党独裁政治や24倍も差がある二重通貨問題などにより、ビジネスに必要な情報を入手できないというデメリットの方が大きい。

一方教育、医療、福祉は無料で、食料や住居など最低限の生活に必要なものは国から支給されるので、国民は安心して生活ができる。裕福ではないけれど、長寿国であることで、人として生を全うできるという安心感が、相対的に治安の良さにもつながっている。いくなれば、ブータン王国のようにモノの豊かさを求めず、心の豊かさを幸せの指標にしているというところだろう。

エルナンデス会頭が、キューバが誇るものは教育であり、人への投資が重要であることを力説されていたが、政權が今の体制を無理にでも維持するのか、中国やベトナムのように資本主義導入に向かうのか、今後の動向を注視しておくことが必要だろう。

人種の“モザイク”で成長を模索するカナダ

カナダの人口は3520万人と、世界第2位の国土面積の割には少ない。その上日本と同じように高齢化が進み、このままでは衰退を余儀なくされてしまう。そこで働き手の確保のため、積極的に移民を受け入れ、その数は年間で難民を含め30万人を超え、移民による人口増は2011〜2016年の5年間で170万人に及ぶ。そのため人口は主要7か国（G7）で最大の伸び率1.0%を誇っている。

今年にはカナダの建国150周年にあたるが、その記念式典でトルドー首相は「カナダの最大の誇りは世界中のどこからでも人々を受け入れることだ」と、隣国であるアメリカのトランプ大統領とは一線を画し、移民や難民の受け入れに寛容な姿勢を続ける姿勢を強調した。

しかし、単純に移民を受け入れるのは日本でも議論があるように宗教や習慣の違いなど、決して簡単なことではないが、カナダでは国の主義に合わせるのではなく、母国の文化や習慣、宗教や考え方もそのまま受け入れ、逆にその人も他国出身の人々を、自分がされたのと同じように受け入れる。そのすることによって新し



モンリオール市庁舎前にて集合写真

い文化や技術、サービスまでもが創造される。そういったプラス思考の考え方を人種の“モザイク”…いろんな色が混ざり合うのではなく、主張し合いながらも全体としては調和している。そんな国家を目指しているといえよう。

さて、今回のカナダ訪問は、IOT先進地として、どのような政策を行っているのかを、京都府と友好提携協定を結んでいるケベック州に学ぼうということ。IOT導入を解析支援するベンチャー企業mumbo社のフランソワ・マルタン氏に会社の概要について説明を受けたが、同社にはビッグデータやIoT、AIの専門家を擁し、既に日本を始め世界各国の企業にサービスを提供しているとのこと、敢えてモンリオールに事務所を構えているのはケベック州からの支援や補助が手厚く、若くて優秀な人材が豊富であるからだという。

また、3人のケベック州担当者からも産業振興政策についてのレクチャーを受けた。モンリオールは大学のまちであり、カナダ最古のマギル大学やモンリオール大学など4つの総



トロントの夜景



mnubo社よりレクチャー

合大学のほか、いくつもの教育機関があり、海外からも優秀な留学生が集まっている。特にA-1やO-1に関しては世界的に権威ある学者がいるため、その教授を募ってくる優秀な学生も多い。そうした大学と州の産業支援と綿密に連携することによって、高度人材を数多く生み出し、起業に結び付けているとのこと。京都にはグローバルな電子部品メーカー等があり、双方の交流により、お互いの強みを活かす連携が可能ではないかとの意見もあった。ケベック州と京都府との連携はこれから密度を増していくことになるが、企業同士もこの協定を活かしてあらゆる角度から連携の可能性を探っていくことが必要なのではないか。

それにしても、熱心に州への投資機会をレクチャーいただいた州政府のキム・アーユー氏はアジア系移民で、MSC、MBA取得者。自信に溢れたプレゼンと質問に対する明確な回答はその優秀さを証明している。彼を見ていると、単に単純労働のためだけに移民を増やす政策を取っているのではなく、国の将来を担う優秀な人材も海外から取り込んでいくという、カナダの未来を見据えた「モザイク」政策の姿を垣間見た気がする。

Hino Motors Canada社(日野自動車)

トロントで日系進出企業を訪問



Hino Motors Canada社の河村社長(左)



トロント郊外、ウッドストック市にある生産工場を訪問。同社は日野自動車の100%子会社で、従業員数141名、日本人駐在員5名。工場は2006年に立ち上げ、従業員は約80名。年間生産台数は2500台で、中型トラックの生産・販売台数ではカナダでトップシェアを誇る。

社長の河村祐三子氏は小柄な日本人女性。それこそ様々な人種の従業員をまとめて奮闘しておられた。

Sleeman Breweries社(サッポロビール)



オンタリオ州ゲルフ市にあるスリーマン社のゲルフ工場を訪問。同社は1834年に始まった歴史あるビール会社で、カナダ国内ではモルソン、ラバットに続く第3位の生産量を誇る。従業員数は1100名、日本人駐在員は6名。サッポロビールは2002年に委託製造のオペレーションを開始し、2006年に100%買収した。